



Suigara-yama_OoazaHyo(Kyoko_Umino)

2009-12-25

城の前と先にて。痛い静けさが気持ちいい



Navigation

[Previous 月](#)
[Next 月](#)
[Today](#)
[Archives](#)
[Admin Area](#)

Categories

[All](#)
[General](#)

灰皿町の本

●[幻想小説『なめくじキーホルダー』 清水鱧造](#)

●[「週刊読書人」詩時評 一九九二-一九九三年 清水鱧造批評集 第二分冊](#)

Search

来年初め、兵庫県城崎に出かけることになった。ふと志賀直哉の『城の崎にて』を思い出す。療養にいった先の話で、明るい海と少しの寂しさが重なり合い、土地を掬い取るように描いている、そんな話だったように記憶していた。空がのんびりと青い。海の青と重なりながら、わたしのなかから取り出した景色はおおよそそんな風なものだった。

わたしの部屋は、本を探すのが困難だ。引越しをしてくださったが処分してしまったからということもある。それよりも、まだかなり存在する本が、どこにあるかわからないことのほうがやっかいだ。処分してしまった本は、ほぼどれだったか覚えているが、家にまだあるものは、あるということでこちらも安心してしまったのか、どこにあるのかおおよそばな記憶しかないからだ。

志賀直哉はだが割とすぐに探せた。新潮文庫で何冊かある。早速読む。大正六年（一九一七年）、三十四歳のときの作品。彼に限らず、大正期、昭和初期の人々の書いたものは淡々としながらも奥行きがあるように感じられる。たとえばこんな文章。

「冷え冷えとした夕方、淋しい秋の山峡を小さい清い流れについて行く時に考える事はやはり沈んだ事が多かった。淋しい考だった。然しそれには静かでない気持ちがある。」

ところで、『城の崎にて』は、前述のとおりの話ではなかった。東京で電車にはねられて養生しにきた、ここまでは大体いいとして、一口でいってしまえば、電車にはねられたことにより、死を身近に感じはじめていた話者が、死と生を身近な出来事から掬いだし、考察する話だった。死んだ蜂、溺れた鼠、偶然殺してしまった蟋蟀...。彼らの生と死がリアルに迫ってくる。というよりも、彼らを想う話者の心の動きがリアルなのだ。

「淋しい考」と「静かでない気持ち」は同時に存在する。それと同じように、「生きている事と死んで了っている事と、それは両極ではなかった。それ程に差はないような気がした。」生と死は、近いのだ。それは死ぬまいと努力しつつ、静

ビジネス英語を
かりと学ぶなら、
シェーン英会話！
10/17迄の体験キ...

TOEIC® L&R テス
ト対策したいなら、
シェーン英会話！
10/17迄の体験キ...

詳細情報

目的に
中的に
の巨
10/1'

Login

ログインID:

パスワード:

☐ このPCを他
の人と共用する

ログイン

Powered by



かな心持でいることでもある。

では、わたしは、景色を静かに淋しく書いたものだと、何と勘違いしていたのだろうか。それは後述する。この日、『城の崎にて』を読んだ後、この頃ずっと少しずつ読んでいた久世光彦の『昭和幻燈館』（中公文庫）を開いた。これは昭和文化の影に満ちた部分への偏愛が美しいエッセイ集。ポー、乱歩、同潤会アパート、ヴィスコンティ、異国、ディートリッヒ...殆ど小説のように読んでいたのだが、こんな文章に遭遇した。

「私の記憶の底の母の胎内には、底知れぬ不安や恐怖と同棲して、虹のように心安らぐ永劫の時があり、孤独ではあるが決して他者に浸されない安逸が陽炎のように暖かく漂っているのである。だから、あの譬えようもないもどかしさは、行方の知れぬ絶望であると同時に、まるで時が歩みを停めてしまった楽園の平安そのものとも言えるのである。とするなら、医学的には胎児というものは既に生の領域に入るのであろうが、胎内は〈生以前〉——それは多分私たちが〈死〉と呼んでいる状態——をも包含している世界なのではあるまいか。」（前掲書「胎児の記憶」より）

まるで二卵性双生児のような、いや双子星のような文章に驚いた。それも『城の崎にて』を読んだ直後に会ったということに、なにかわたし自身が彼らをつなぐ橋となって、まんなかでたゆたっているような気がしてきたのだ。それは生と死の間でもあるのだが。こんな惹かれ合う偶然は、実はよくあるというほどではないがめったにないというほどでもないぐらいには起きることだ。そんな折、予感のようでもあるが、ことばたちがあるいは事象たちが呼び合っている、その声を聞いたような、何かにつなぎとめられているような気がする。どこかでうなずかれているような気もする。

ところで、ここでそろそろ後述するといったものの種明かしをしよう。

「サササと日が翳る。風景の顔色が見る見る変ってゆく。」

「入江には舟が舳っている気持。／ それはただそれだけの眺めであった。何処を取り立てて特別心を惹くようなところはなかった。それでいて変に心が惹かれた。／ なにかある。本当になにかがそこにある。といってその気持ちを口にせば、もう空ぞらしいものになってしまう。」

「今日も入江はいつものように謎をかくして静まっていた。」

...こうした文章たちが、なんとなく心に残っていた。風景がまざまざと浮かんでくる。それはたとえばモネが描いた睡蓮をとおして、わたしが実際の睡蓮と出会うということに似ている。志賀直哉の蟋蟀の描写を通して蟋蟀を直に感じることにそれは根をともにしている。ちなみにこの抜き出しは、梶井基次郎『城のある町にて』だ。「城」という文字があったこと、そして海を描写しているから、思い違いをしてしまったのだとどこかであきれた。『城のある町にて』はどこと明記はしていないが、I 湾とあるので、伊勢湾、三重県松坂市だと解説にあった。書かれた時期は『城の崎にて』と割と近く、大正十三年（一九二四年）。

『城のある町にて』も、読み返してみる。すると、あきれつつもごっちゃにした理由もわかるような気がしてきた。こちらは、妹を亡くした主人公が悲しみを療養するために姉夫婦の住む町にやってきたもので、彼らと義兄の妹、姉夫婦の娘（主人公の姪）との日々をつづったもの。こちらも死が描かれ、そして静かに生に裏返っているといっていいかもしれないから。淋しいような熱をもって。妹の死から、姪や義妹の生に少しずつ傾斜してゆく。だがその移行はあまりにも静かすぎて、やはり取替え可能なものとし、どうしたって思えないのだ。

「「たくさんの虫が、一匹の死にかけている虫の周囲に集って、悲しんだり泣いたりしている」と友人に書いたような、彼女の死の前後の苦しい経験がやっと薄い面紗のあちらに感ぜられるようになったのもこの土地へ来てからであった。」

これが着いてまもない頃、そして最後のほう。

「母と娘と姪が、夏の朝の明方を三人で、一人は乳母車をおし、一人はいでたちをした一人に手を曳かれ、停車場へ向かってゆく、その出発を彼は心に浮べていた。美しかった」。

だが、どちらにしても思い違いは思い違いだ。景色よりも人を、この城たちは、どちらもそれでも重心を置いて描いている。そうだ、わたしは思い出す。梶井基次郎のほうが、志賀直哉よりも読んだのはずっと前、とても若い頃だった。その頃のわたしは、まだ景色にリアリティを感じていなかった。それはほとんど添え物に等しいものだった。小説を読んでいても、景色がなかなか響いてこない。だが、そんななかで梶井基次郎の景の描写はとても詩的だと思った。景色とわたしをつないでくれる大切なことばたちだった。そんな記憶から、景を、土地を、淋しく静かに震えさせてくれている小説だと思ってしまったのだと。

そしてこういう思い違いは悪くない。間違いたちがあたらしい出会いをわたし

TOEIC® L&R
ト対策したいなら、
シェーン英会話！
10/17迄の体験キ...

今だけ入学金0円+受
講費割引あり/
シェーン英会話
10/17迄の体験キ...

詳細情報

ビジ
かり
シェ
10/1

くれる。わたしのなかで回路がまたつながれる。いや、わたしの外でかもしれない。それはこんな回路ともつながれるだろう。

「...わしが旅を好むのは—じっとしては見れんものが見られることじゃ...
(中略) 絵を描くのが実は旅によく似ている 新しい絵を一枚描くのは 新しい景色を見るのと同じ」

「景色というものは—見る人のその時の心のありさまによってもたたまええる 自然も生きておるといことじゃ 人の心を通して 生きも死にもするといことじゃ」

これは石ノ森章太郎『北斎』(角川書店)、葛飾北斎の一生の一端を描いたコミック。つい最近読んだのだが、石ノ森章太郎自身すぐれたアーティストだったから、ことばに真摯な意志と尊敬と憧憬、もろともこめられていて、あちこち心地よい。そして、特にここにあげた、北斎のことばが心に響いた。

それはこのところ日々におわれて景からまたはなれそうになっているわたしへの警鐘でもあった。気づかないうち、秋から冬へ、ほとんど移行してしまった景たち。それはわたしにとって、またもやリアリティのうすい、遠いものとなりつつ、動いてゆくものだった。数十年前なら、そのことにさして拘泥しなかっただろう。だが、今はそのことが淋しいようなしこりとなってわたしに残ってやまないのだ。風が変わった。

今日、公園をゆっくりと自転車で通り過ぎた。落ち葉が悲しいぐらいに賑やかに敷き詰められている。かさかさとかわいた音がちいさくふるえる。晴天だった。淋しい、静かな気持ち。すっかり葉の落ちた木々が、落ち葉に影を落としている。それは空に向かう血管のようだった。ほとんど死んだように枯れた枝が生きて空をあおいでいる。わたしはその場を目撃しているのだ。落ち葉がかさこそ音をたてる。日陰がまぶしい。そこには去年、一昨年、もっと以前、冬が苦手なわたしも重なるだろう。風が変わった。北斎、モネ、蟋蟀、死体の埋まった桜...。家の近くの湧き水の水量が減っている。人工的に作られた池には、渡り鳥、特にカルガモたちが多く集っている。景が静かに痛い。そのことがどこかでうれしい。



02:20:04 - umikyon - No comments

2009-12-15

浮世絵百華展、表裏一体に霽も晴れる

たばこと塩の博物館（東京・渋谷）に「浮世絵百華展」（前期・二〇〇九年十一月二十一日―十二月十三日、後期・十二月十五日―一月十一日）の前期を観に行く。例によって北斎が目当てだった。

前日まで頭が困惑していた。日々のみこまれそうなめまいが襲ってきていた。美はこうしたときに救いにはならない。というよりも、美をそんなときに救いにしてはいけないのだ。それは心して向かうものだから。それは断じて趣味ではない、生き方そのものなのだ。安易にすぎるものではない。わたしのなかでは対人関係と同じだ。安易に、相手を思うことせずに頼ろうとするとつきはなしてくる。わたしはその前で、萎縮し、悩む。だがどうした加減か、それでもそれはいやおうなくわたしを救うのだ、他者のように。

向かう途中、木々や川、水鳥たちの声や姿が見えなかった。見えてはいたが、それは語りかけることが一切なかった。いつもなら、ほとんど何かしら刺さってくるものたちなのだが。だから美術館に出かけても、刺さるものはないかもしれないと思う。もう忘れてしまったが駅構内の売店だったか、渋谷でだったか、ささいな品物を買った。店員さんににこやかに接していた。こんな表情がまだできるのかと思う。自分の笑顔に違和感があった。うさぎのぬいぐるみをどこかでもらう。ますますの違和。まるで霧の中だ。あるいは体が霧の外で活動しているのだが、心だけ霧の内に拘泥していて、外と連携がとれないままにいるようなのだ。ピンク色のウサギが霧のなかで、かろうじて見える。ああ、うさぎはHTさんが好きだったな、あとで送ってあげようと、しびれたように、ひとごととしてどこかと思う。

会場のたばこと塩の博物館は、はじめてのところだった。二階と中一階が煙草、三階が塩、そして四階が特別展示室で、今回のお目当ての展覧会会場となっている。図録を買わなかったのだろうおぼえなのだが、四階にはいってすぐのところにあったあいさつ文に、、「それまで「憂き世」という字のとおり、現世への厭世的な視点で語られ、見られていたものが、近世になり「浮世」、つまり現世を肯定する視点から語られるようになった。これはヨーロッパにおける市民階級の勃興と時期を一にし、江戸の町民文化の精神的爛熟さを...」

大体こんな文章だったと思うが、自身に照らし合わせてはいけないと思いつつ、憂き世と浮世の違いと繋がりに、なにかの啓示をみたようだった。それはコインの裏表だ。ヤムスの鏡だ。どちらもウキヨ、同じ音だ。それは同じ面の影と日なただ。浮世という日なたは、希望を幾分含んだ、発想の転換ではあるが。だが浮世は、浮ついた世の意味でもあるのだ。

あいさつ文には、「浮世絵は、浮世という現実、生活に徹底的に美を求めたもの」ともある。現実と美の密接な繋がりも、このところのわたしのなかの大切な源となっていることだ。

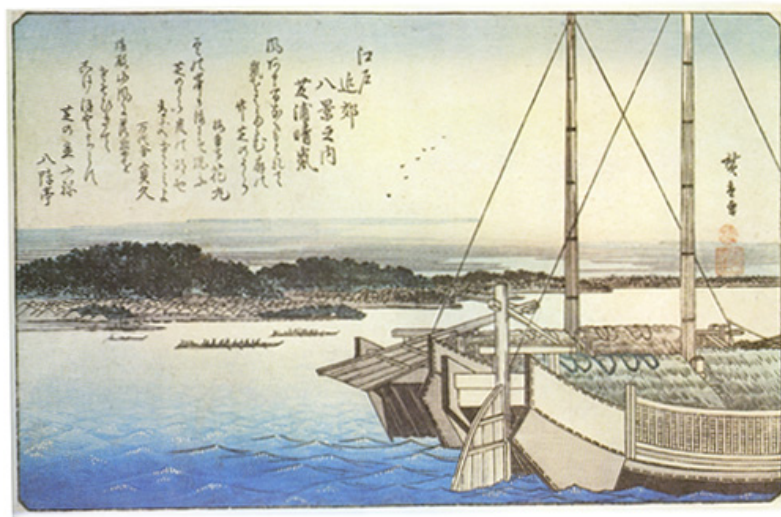
北斎は、入ってすぐのところに半紙本が何冊もあった。綴られた半紙に一色刷り、つまり黒だけで描かれた絵たち。「富嶽百景」（初版一八三四年）というものもあった。富嶽三十六景でおなじみの赤富士のような絵に、そのかたちに再会の親しみをおぼえた。それはやはり救いだった。荒々しい息遣いがわたしにまっすぐに飛び込んできたから。

半紙本の次が浮世絵展示となる。ほぼ年代別に分かれているので、しばらく北斎はおあずけだ。その前に広重。私は彼はあまり今までざわめくものを感じたことがなかったのだが、今回珍しく引き寄せられるものがあった。《江戸近郊八景之内 玉川秋月》（一八三七―三八年）。これは以前にも日記などで書いた、わたしの好きな多摩川を描いた作品だが（北斎の《富嶽三十六景 武州玉川》とほぼ同じ場所、調布と狹江の間ぐらいだと思われる）、そのことで引き寄せられたのではない。画面はこちらの岸に柳、漁る人、対岸に山、そして月。この月に惹かれたのだった。いや、月が出ているから夜なのかもしれない。だが川も遠い山並みもほぼはっきりと見える。ただ岸も対岸も空も青い色彩で統一されているのが、夜らしい気配ではある。おそらくこの昼とも夜ともつかない感覚が琴線に触れてきたのだ。満月が見える。月の景色というのはなぜか静かだ。無言のまま、ことばではないものたちが世界に満ちている。



《江戸近郊八景之内 玉川秋月》

もう一枚、同じシリーズの《江戸近郊八景之内 芝浦晴嵐》（一八三七—三八一年）も、アンリ・ド・リヴィエール（一八六四—一九五一年）の木版画でも見ているような静謐さを感じた。画面右手前にかなり大きな和船、その向こうに海、そして岬だか小島。いや、リヴィエールを彷彿としたとしても、それは逆だ。彼は広重や北斎の浮世絵に影響を受けて木版やリトグラフを作っていたのだから。そうではなく、リヴィエールのこの絵を観たときのおののきが、静謐さをたたえた海から伝わってくるようだったのだ。それはリヴィエールと広重をむすぶ共鳴が聞こえたといってもいい。



《江戸近郊八景之内 芝浦晴嵐》

会場は入口と出口が同じで、右周りに四角く一周するようになっている。出口付近に北斎の浮世絵が並んでいた。ということは入口の北斎の絵本とかなり近い場所だということだ。影と日なた。出口と入口。この間「夢と追憶の江戸展」（三井記念美術館）で見た《富嶽三十六景 神奈川冲浪裏》（一八三四—三五年）と、実物は初めての《富嶽三十六景 凱風快晴》（一八三四—三五年）が目立つ。後者は赤富士と呼ばれるもの。空はいわし雲で、空色とひっかいたような白たちが流れるようで眼に痛い。そして赤い威容をほこる富士。だが下のほうは緑をなしている。これは朝方、朝日に赤く染まる富士の瞬間を描いたもので、赤を使うのは当時、画期的なことだったらしい。それはともかく、雲に風を感じる。そして赤に時間を感じる。だが富士の形はそれらを越えて止まっているようで、そのことに打たれた。富士とかたたちが圧倒的にしみてくるのだ。どうしてこれほどまでにひきつけられるのか最初わからなかった。だがその不動の力におそらく畏怖を感じたのだ。隣にあった《神奈川冲浪裏》も、観たばかりだというのに、浪の形に、つまり今度は動

に、どうしたことかとても心に響いてきた。その飛沫の白さのはじける音さえ聞こえてきそうなつづつに、そして浪という動が形づくる富士の不動という面白さ、動が不動と響きあっていることに。



《富士三十六景 凱風快晴》

これらの富士の隣が《杜若にきりぎりす》（一八三二年）。群生しているカキツバタ、その葉にほぼ垂直に下向きのキリギリスが乗っていて、花の裏、葉の裏まで克明に詳細に描かれている。これは西洋の植物画に観られるような、生きていない標本的な世界ではない。花も葉も風になびいているのだ。キリギリスの触覚も生きるためにたわんでいる。細部に渡り、生きている瞬間を描いているのだ。そのことに涙がでそうになる。



《杜若ときりぎりす》

さらに隣、そしてラストが《詩哥寫真鏡 雪中人馬》（一八三三—三四年）。雪の道を馬に乗った人物と徒歩の人物が進んでいる。雪の白い道は細く、周りは池になっている。橋ではないが、橋を渡っている感じだ。その池が境目なく空になっている。画面中央には、青のなかに水鳥が浮かんでいるのだが、画面上方は雪が降っている。空と水の境がつかない。道はまるで空に続いているようでもある。先の広重の《江戸近郊八景之内 玉川秋月》でも書いたが、わたしはこうした境目のなさ、不分明さにとても惹かれる。それは接点だからだ。日々と幻想の往還する場所だからだ。そして出口、ラストにふさわしい置かれ方だとも思う。道は接点としてどこかしら続いているのだ。

そう、会場を出る前からだが、ここに来るまでにかかっていた日々の霽はだいぶ晴れていた。霽が晴れて、見つかった道のどこかから彼らが囁きかけてくれることに感謝していた。

一階のミュージアムショップで、絵ハガキ数枚と、明治から大正時代ぐらいのものであろうか、復刻された絵柄のマッチ箱が売られていたので数個買う。そのうちの一つはうさぎのぬいぐるみと一緒にHTさんにあげようと思う。外に出ると年末に向けた街がにぎやかでまぶしい。日なたと日陰。

00:01:00 - umikyon - No comments

2009-12-05

ロートレックコネクション、賑やかで寂しい



「ロートレックコネクション—愛すべき画家をめぐる物語」（十一月十日—十二月二十三日、Bunkamuraザ・ミュージアム）に行った。これは今年のはじめにミュージアム・フレンズとして、お得に購入したチケットの最後の一枚。回数券のようなもので、今後催される三回から四回分の展覧会鑑賞チケットがつづりとなっている。観られる展覧会はこの一年の予定に限定されるが、当日一四〇〇円位のものが、七〇〇円～八〇〇円で見られる計算になるので、観たいという内容があればかなりお得なチケットだ。私はちなみにこのチケットで、「国立トレチャコフ美術館展—忘れえぬロシア」「だまし絵」展、そして「ロートレックコネクション」に来た。ほぼ観たいものばかりだったので重宝した、夢の国へのチケットだった。ちなみに、ここでつい最近開催された「ベルギー幻想美術展」は、急遽決まったプログラムだそうで、このミュージアム・フレンズでは観れなかった。ともかく今回は最後の綴り。最後というのは、いつもどこか物寂しい。秋の葉が落ちるようだ。かさこそ音をたてる落ち葉たちを踏んでゆくのも楽しいようで寂しい。秋は賑やかでそして悲しい。

さて展覧会。今回はコネクションとあるとおり、「若いころ師と仰いだ画家」、「共に画法を打ち立てた若い画家たちや賞賛しつづけた巨匠」との関連に注目したもので、同時代の彼に近い様々な画家たちの作品も展示されている。ボナール、モーリス・ドニ、ヴューヤール、ドガ、ゴーギャン、ジュール・シェレ...

それを楽しみとすべきか。もしかするとこちらの観る眼の鈍さのせいだったかもしれない。このところ日常のこと、現実のことに不愉快なまでに拘泥していた。それは砂地獄のようだ。ざらざらと砂が視界をふさぎにかかる。砂埃に眼球をうたれるようだ。それは執拗にやってくる。あたりいぢめん、紗のかかったねばつく景色となる。

あるいは去年、サントリー美術館での「ロートレック展」（二〇〇八年一月～三月）で、あらかた観てしまった作品ばかりだったから、ということもあったかもしれない。なにか新規さを感じられないのだ。

だがどうしたのだろうか。いつものような共鳴の大波はなかったのだが、だんだん寂しくなってきた。賑やかで寂しい。舞台ポスター、店のポスター、ざわめきや熱気を描いているはずのそれらが、どこか悲しげにみえてきたのだ。頹廃ということばに、いつだっていくぶんかの悲しみを感じてしまうように、それらの熱気は、ざわめきは、どこかしら影の部分を感じさせる。それらで会場全体が満ち始めたのだ。

チラシやポスターで使われている《歓楽の女王》（一八九二年）は、レストランで椅子の座った太った頭の毛の薄い紳士が、高級娼婦の顎に口吸いをしている。キスではなく、ついこう言いたくなってしまうぐらい、タコのように口を伸ばして吸っている。両者とも伏し目がちだが、それらの目線の先がかみあっていないからか、愛情がないようにみえるのだろうか。それらをふくめて、寂しいのだ。いまにもにぎやかな曲が聞こえてきそうなぐらいの喧騒なのに。喜怒哀楽は、実は、とてもそれぞれ近いものだ。わたしの場合はそうだ。怒りはすぐに悲しみになる。け

たたましいほどの喜びもまたすぐに苦しみに落ちてしまう。歓楽の女王は、歓哀の女王という裏をふくませて、哀しい。



《歓楽の女王》

ロートレックとかなり密接な親交があった、歌手のアリステイド・ブリュアン。彼を描いた作品は、以前から好きだった。つばの広い帽子、翼のようなマント、広げた足によく似合う長靴、赤いマフラー、彼は威風堂々とゆるぎがない。信念をもった人物としてだろうか、なにかしらを訴えかけてくるのだ。だが今日は、どうしたことが、彼もまたさびしいのだ。孤高の王といった趣だ。《アンバサドゥール、アリステイド・ブリュアン》（一八九二年）は、当時、シャンゼリゼで最も洗練されていたというカフェ・コンセールのポスター。今書きたいでたちのブリュアンが、杖をもって、幾分か顎をあげて左をむいている。顎のあげかたに、きりっと通った鼻に自信を感じる。だがどうしてか彼は孤高なのだ。眼がカフェから遠い場所を見ている。それは歌の王国かもしれない。にぎやかさの果ての、密接なつながりをもった暗がりかもしれない。彼の背後には、あやしげな夜が顔をのぞかせている。

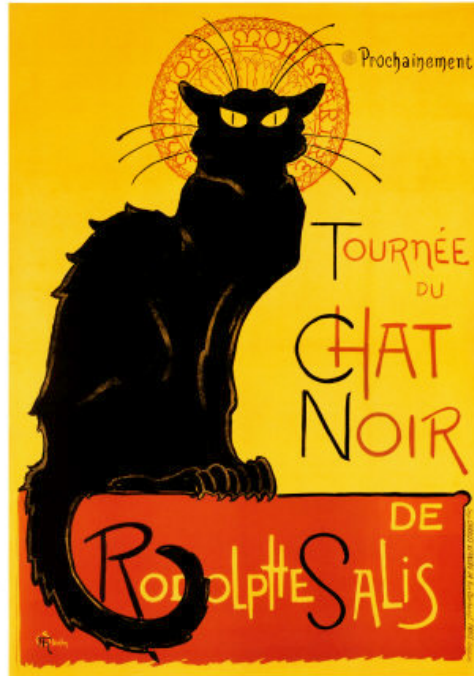


《アンバサドゥール、アリステイド・ブリュアン》

そしてこれはテオフィル＝アレクサンドル・スタンランだが、《イヴェット・ギルベール》（一八九四年）。やはりアンバサドゥールだというカフェの舞台の上に立つ歌手のイヴェット・ギルベール。舞台の袖から観客を睥睨するかのよう立つ

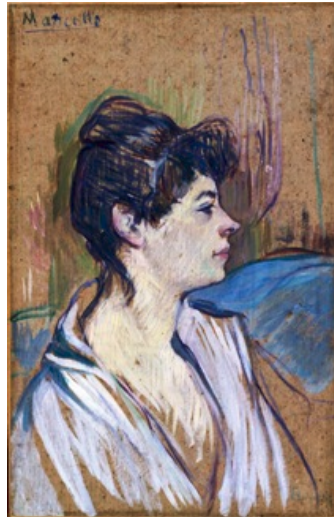
その眼もまた遠い。そして、舞台袖だからか、なにか舞台表と裏の両方の狭間にあるようで、その中間性がなにか舞台と、それがひけた後のギャップのようで、どこか...。どうしたことか今日は（というのは、展覧会を観た日ではなく、これを書いている今日だが）、とても悲しい。だから彼らにそれを展覧会で観たよりもさらに感じてしまうのだ。寂しく、賑やかで悲しい、と。ついでにいえば、季節はもう冬にはいっているだろうが、東京あたり、草木は秋の最後の盛りだ。植栽まで紅葉している。かさこそと落ち葉がさんざめくほどの公園がある。《イヴェット・ギルベール》の舞台、黄色い壁、黄色い床が、こじつけではなく、銀杏の金色の落ち葉と重なり合う。賑やかで寂しい。

スタンランといえば、有名な猫の絵。《シャ・ノワール巡業公演》（一八九六年）。これはキャバレーで、ロートレックも足繁く通い、ブリュアンも出演している。影絵芝居シャ・ノワールのためのポスターということで、黒い猫が高貴なまでに、そしてやはり威風堂々、孤高の姿ですっと立っているのが印象に残った。



スタンラン《シャ・ノワール巡業公演》

そして、トゥールーズ＝ロートレック、《マルセル》（一八九四年）。娼婦であるというマルセルの右を向いた横顔。茶褐色の髪がまとめられ、背景のベージュと均衡を保っている、そして背景には、ベージュの壁のしたに青い枕が見えるベッド。そして厚紙に油彩なのだが、白いおおまかなタッチで描かれたシャツなどから、なにかパステル画のようにも見える。
。わたしはこの絵を実は観に来たのだ。この絵だけ観ればそれで良かった、というぐらいに。



《マルセル》

そして？ 絵を前にして泣きそうになった。人たちがいなければおそらく泣いたであろう。ここにはいつもの絵に対する態度とはちがう思い出が色濃く根ざしている。それはわたしの過去の物語だ。

私は物心ついた頃からこの絵の複製を眼にしていたのだった。居間だったか父の書斎だったかに（狭い家だったのでその二つが兼用になっていた）飾られていたのだ。小さいわたしは別になんということなく眺めていた。へんなおばさんだなぐらいしか思わなかった。名前も知らなかった。後年、ようやく画家の名前だけは知った、ロートレック、それは新聞の切り抜きだったらしい、おそらく掃除か何かだろう、父が額から取り出したのを覚えている、裏に記事が記載されていた…。今眼にするそれは、こうした過去の私、居間兼台所、父をふくんだすべてを含んで存在していた。私だけではない、家族の記憶すべてがつまった宝箱のような絵だった、手をさしだしかけてくれる、鍵、賑やかで寂しい。

この絵は、私が、私たちが家族として存在し、おそらく幸福も感じていたであろう、そんな時間の共犯者、共鳴者、記録者だった。すべてが詰まっている、そして今となっては取り出すことができない、だが、息づかいとしてだけ、こんなふうに、感じる事ができる、そんな記憶媒体装置だった。これはいつものような絵ではない、心底大切な、扉のような鍵なのだ、賑やかで寂しい、賑やかな居間たち。

絵はいつまで飾られていただろう？ 家族たちがいちばん笑っていた頃だ。私が小学生だったか。喧騒とざわめき。背後にはいつだって悲しみがあるのだ。その後で、ばらばらになった家族、ばらばらにねぐらに帰るひとたち。舞台は終わったのだ。

《マルセル》を生で観たのははじめてだ。だがあまりに懐かしすぎて、ただ悲しかった。そして、変なおばさんじゃなかった、若い娼婦だったなどどこかで軽い感想がよぎった。賑やかで優しい。

展覧会会場から出る。ミュージアムショップや、ほかの店で、クリスマスグッズの販売があちこちで見られた。いまだに心がさわぐ。それは宝箱だ、いやパンドラの箱だ。あけるとそれでも希望が残っている。落ち葉の音がどこかで響いた。



ロートレック《ディヴァン・ジャポネ》（一八九二―九三年）

00:01:00 - umikyon - No comments